
捨てる魔王あれば救う英雄あり

竜胆修一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てる魔王あれば救う英雄あり

【Nコード】

N4881N

【作者名】

竜胆修一

【あらすじ】

万屋を営む冴えない赤貧青年、リック・イスデイルはひよんなことから彼の通っていたジステイヴァール大学の学生、アリシア・エーミスと出会う。

アリシアとの出会いは、やがてリックを世界すら揺るがす大事件へと巻き込んでゆく。

赤貧万屋は、真実を明らかに出来るのか？そして何より、生き延びる事ができるのか？

登場人物とかアイテムとか、現時点の設定資料集（前書き）

物語が進むにつれ、更新したいと思います。

登場人物とかアイテムとか、現時点の設定資料集

本作の（現在登場してる）登場人物

リック・イースデイル

本作主人公。

万屋かつ教師かつニートな24歳。

魔術もちよつかじってる、お金と縁の無い生活が友達さ……な人。

逆・玉の輿が夢。

アリシア・エーミス

本作ヒロイン。

もうこっち主人公で良いんじゃない？ とか言われそうくらい運命に翻弄される少女。

名状し難きもの、名付けられざるもの、無名のもの、ことハスタの系列の召喚魔術を多用している。

天性の運動神経と、深い魔術知識、膨大な魔力により、一種のチートキャラとなっている。

とある旧支配者と因縁があるようだが……？

フィーリス・ユーヴェルゲ

本作ロリババア。

ジステイヴァール機密図書館の主。

大学で考古学を教えているが、一部生徒には魔術も教えている。400年くらい生きてるらしいが、当然ながら証人はいない。

代わりに証拠として用いるのが、ロリッ娘なのに魔術知識世界一。アリシアの母らしいが、なんだか微妙な関係らしい。

ロジャー

本作一面ボス。

白衣とチャイナ服はロマンらしい。

5章のサブタイトルが『どんな見た目の人も大真面目でその姿をしている』となった原因はこの人と深き者どもなのは言うまでもない。

魔術師としては平凡。強いて言うなら召喚系が得意。

爬虫類とか両生類が大好きらしい。

依頼人のオジサン

本作モブキャラ第一号。

飼い蛇『マルレーン』が行方不明になったので警察に届け出たが連続殺人犯の大規模捜査のために後回しにされた。

そのためリックの万屋に頼むことにした。

ただそれだけで物語にはほとんど干渉しない人。強いて言うなら金持ち。

アイテムとか

新訳・無名祭祀書

こんな本、現実には無い。

一応オリジナルアイテムとして登場させたが、本物の無名祭祀書の中身が分からなくてスゲー扱いに困ってるのは秘密。

ハスターの剣

アリシアが使用するハスターの力の片鱗。

当然ながら、こんなもんクトゥルフ神話には無い。

なんとなくで作ってしまったアイテム。

それが許されるのがクトゥルフ神話……であって欲しいな。

ダロ

本作通貨。

1ダロで缶ジュース1本が買える。

魔術の種類

確率事象魔術

確率事象を弄り、物体の位置や、動きを制御する魔術。
簡単だが、魔力消費が激しい。

肉体改造魔術

改造と言うと仰々しいが、要は肉体や感覚の強化、または追加機能を付けたりする魔術。

序章でリックが使った魔術師探査がこれにあたる。

多少の知識があれば使用可能なうえに、魔力消費も少ない。

エネルギー魔術

力学的エネルギーをはじめ、あらゆるエネルギーを制御する魔術。
本編ではまだ使用されていない。

魔力の消費が激しく、出力の調整も難しい。

召喚系魔術

最恐最悪の魔術。

旧支配者の力を借りて、怨敵を打ち破る魔術。

魔力は旧支配者持ちなので、術者は魔術の行使を完了すれば、後は任せるだけでよいことが大半。

ただし、魔術の行使に生贄などが必要になることもある。

序章（前書き）

ここに来られた方は、あらすじを読んで来られた方でしょうか？
どうも私はあらすじって言うものが苦手で……ついやつつけない感じになってしまいました。

あのあらすじを読んで、まだこの小説を読もうと思ってくれた方には、いくら感謝してもしきれません。ありがとうございます。

ちなみに、私は今回初投稿なので、「ストーリーがキモイ」とか言わないで下さい。ショックによる身投げ自殺の原因となります。

それでは、ゆるりとご堪能下さい。

序章

魔術とは。

世界の深淵を見つめる事。

世界の真理を探求する事。

世界の可能性を追求する事。

世界の不可能を実現する事。

どれが正しい？ どれが誤り？

——《世界》は狭い。

理由は簡単。世界の九割以上が宇宙なのだ。

空間は在る。だが物質で満たされていない。

いや、暗黒物質とか言うものがあるのだから実は物質で満たされているのかもしれない。

だが、その中で人知が及び、暮らせる場所は余りに少ない。

在って無きような空間が殆ど。世界は、その殆どが虚無に等しい。その虚無の中で、物質が寄り添い合って、《世界》は成り立っている。

限りなく虚無に近い世界の中にある《世界》。

そして、今俺という世界の中の《世界》も、残りあと僅かだ。

視界が霞む。意識が朦朧とする。体に力が入らない。

俺の《世界》は今まさに消滅しようとしていた。

——要するに、腹減って死にそう。

ここ最近口にしたのは塩と水ぐらいのものだ。

ちなみに、それ以外には乾いた米、数粒だったりする。

路地裏の野良犬の方がまだましな食事をしているのではないかと

思う今日この頃だ。

そもその問題が、俺の経営する万屋に依頼が全く来なかったせいだ。

借金はしない主義な俺は、貯金を全て今月の家賃に持って行かれ、無一文に。

「……………腹減ったあ」

こんな時、たかる相手がいれば良いのだが、生憎そんな気のいい知り合いは俺には居ない。

そして、外に出るという一見無謀な行動は、落ちている食べ物やお金を探すという非常に建設的な思考に基いたものだ。

こんな生活でよく今まで生きていられたなど、自分で苦笑する。

ああ、もう、視界が霞んできた。

このまま俺の人生はデッドエンドでエピローグに突入？

どこからともなくクリスマスソングが聞えてくる。

俺の人生のエンディングテーマはクリスマスソングか……。

お経や、聖書の言葉よりこっちの方が堅苦しくなくて良いかもしれない。デッドエンドだけど。

そんな事を考えてる内に、もう寒いのか、暑いのかも分からなくなっていた。感覚まで鈍感になってきてるらしい。

「——パトラッシー、僕もう疲れたよ。」

月並みな辞世の句を詠み終わると同時、俺の意識はブラックアウトした。



「ハッ!？」

昇天した俺がたどり着いた場所は……病院？

周りの風景はやたら白い。一瞬天国かと間違えるほどのものだったが、どうやらこの世の病院のようだ。

「あ、気が付きましたか？」

俺は横から掛けられた優しい声に振り向く。

「良かったです。目の前で急に倒れたときはどうしようかと思いましたよ」

……やっぱり天国だったのかも。

こんな可愛い娘が俺の隣に居るなんてこの世なワケがない。

さらりとした銀色の長髪と大きなリボン、そしてサファイアのよ
うな澄んだ碧色の瞳が印象的な女性。

いや、今は彼女の容姿より状況確認の方が先か？

「……アンタは？」

まずはここだ。彼女が何者なのか、それが重要だ。

「あ、自己紹介がまだでしたね。私、アリシア・エーミス。この病院の近所のジステイヴァール大学に通ってる三回生で、道端で倒れてたあなたの第一発見者です」

成程、それで救急車を呼んだってワケか。OK、それは許そう。
だが、だがな。アンタは致命的なミスを犯している。

「俺、金持ってないんだが……」

「あ、大丈夫です。私が既に支払っておきました」

……神よ、普段全く信じてないけど、今の俺はアンタのために何だって出来そうだ……。

「じゃあ、返した方が良いか？ 保険入ってないし、かなりかかったろ？」

「いえ、結構です。栄養失調で倒れてる人がお金なんて持ってないですよ？」

……お察しの通りで。だが――

「そう言うアンタも、そんなに金に困らない人間には見えないけどな」

「そんな事ないですよ。結構な数のバイト掛け持ちしてますから、大学の教材買うにも困った事はないです。エッヘン」

金持ちをアピールしたいのかもしれないが、苦学生って自白してるぞ。

「家賃の滞納もした事はありません！」

でも幾つものバイトあつてのものだろ？ 最近は無職に等しい俺が言うのもなんだが……。

「三食おやつ付き。しかも朝はパンにジャム塗り放題なんですよー！」

そ、それは……なんて羨ましい！

三食欠かさず食べられるなんて、夢のような生活じゃないか！

「完敗だ。骨の髄まで、完敗だ」

何か上の句が出来上がってしまった。

「ふっふっふ、恐れ入りましたか？」

「ああ。俺の負けだよ」

金持ちって、凄いな……。

いや、普通の人なら誰でもできることなんだろうけど、赤貧の俺からしたら、それだけで十分金持ちだ。

「ところで、あなたのお名前は？」

あ、そうか。まだ名乗ってなかったな。

「俺は、リック・イースデイル。一昨年度にジステイヴァールを卒業して、今は万屋やってるよ」

「……一昨年度に卒業してるなら……私から三年先輩なんですね」
「まあ、そうなるな」

俺は特に留年もしなかったし、誕生日もまだ迎えてないから歳が四歳以上離れてるって事は無いだろう。

「ちなみに、リックさんは、何学部だったんですか？」

…… 本当の事を口に出してはならない。表面上は確か……

「考古学、だったな」

「そうなんですか？ 実は私も考古学専攻なんです」

……彼女は、本当に考古学専攻か？

それとも………ちよつと試してみるか。

——サーチ調査魔術……マギウス・ダウンジング魔術師探査

彼女はすぐそこに居る。引つ掛かるなら一瞬で引つ掛かるはずだが……

「ふふ、栄養失調の赤貧男性が、無理しちゃいけませんよ」

そう言つて彼女は一冊の本を取り出し、俺に見せた。

《新訳・無名祭祀書》ネームレス・カルツ

「——そうかい」

手間とエネルギーが省けた。

彼女も魔術師か。それもかなり優秀な部類の。

普通、ネクロノミコンをはじめとする貴重な魔導書を閲覧する事の出来る人物は、人類の中で一握りの人種である魔術師の中で更に一握りの人物だ。

仮に写本であつたとしても、持ち出しが許可されるなんて在り得ないと言つても過言ではない。………つて先輩に聞いた。

「………つて、新訳？」

「はい、新訳です。もちろんオリジナルには程遠いですけど、優秀な魔導書ですよ」

新訳なんてモノがあったのか。相変わらずあそこの図書館の蔵書は底が知れないな。

「それで、この道に進んで後悔はしてないか？」

正直な話、世界の深淵へと手を伸ばす魔術に触れ、自殺した者。術者の放つ闇の臭いに誘われて現れた怪異によって命を落とした者は後を絶たない。

もし命の恩人でもある彼女が悩んでいるのであれば相談にくらいは乗ってやりたい。

「どうして後悔するんですか？」

彼女は首を傾げて言う。彼女は、世界の深淵の闇を何とも思っていないのか？

「え？ あ、いや、魔術師になれば怪異に襲われたり、色々面倒だろ？」

彼女の返答に面食らった俺は適当な言葉しか言えなかった。

「大丈夫ですよ。私、結構強いんです。普通の怪異くらいなら倒しちゃいます」

……だろうな。新訳の力がどれ程弱いものであったとしても、無名祭祀書の持ち出し許可が下りるぐらいだ。そこら辺に居るオカルトマニアなんかよりずっと強いだろう。

「……と、そろそろ時間ですね。私はこれから講義なので、失礼しますね」

アリシアが立ち上がり、病室の扉に手を掛ける。

「じゃ、リックさん、また後日、会いましょう」

「ああ、またな」

……………また後日？



理由はすぐに知れた。

数日後、病院から帰った俺を待っていたのは郵便受けに入った一通の手紙。

ジステイヴァール大学からだ。

《教員が不足してるから無職のプータローなお前に教師と言う職を与えてやる。感謝しろ》

こんな相手にへりくだる気ゼロな文章を書ける人物を俺はまだ一人しか知らない。

間違いなく、アイツだ。

とはいえ、手紙の文面に腹を立てている場合ではない。

幾ら病院食を詰め込めるだけ詰め込んだとはいえ、無一文じゃ餓死も時間の問題だからな。

「……しゃーない、行くか………」

一瞬だった、あの銀髪の少女が脳裏を掠めた。

ただ、俺が彼女に教えられる事なんて無いだろうし、やっぱ教えるなら別の人間だろうな。

一応卒業したとは言え、俺の卒業は単位を取っただけの本当に『一応の』卒業だ。

世界の闇の奥深くに入り込んでゆく勇気が、俺には無かったのだ。

俺の他にも何人か学生自体は居たが、そいつらの大半は皆闇に呑まれて正気を失った。

残された人間も俺のように臆病で基礎以上に踏み込まない者が、正気は保っていても性格が歪んでしまった者が殆どだ。

だから、俺は気になったのかもしれない。

世界の深淵を垣間見つつも、なお正気を保ち続ける彼女が。

ってあれ？ アリシアみたいな逸材が居るなら狭いあの学部だ。

多少なりと噂になるだろうし、第一、あんな美人を見落とすとは考え辛い。

だが俺は、彼女を見た記憶が全くない。どういうことだ？

「……妙だな………」

違和感を拭い去れないまま俺の意識は闇へと消えて行った。



「お、やっと来たか。待ってたぞ、若いの」

俺を出迎えたのは俺よりも頭二つは背の低い少女の容姿をした……
齡四百を下らない魔女、フィリス・ユーヴェルゲ。

「俺を教師にするって、正気か？」

ハッキリ言つて魔術の本懐の『ほ』の字にも足を踏み入れていない事はコイツも理解しているはず。

何故なら、俺になけなしの単位を与えていたのは他ならぬコイツだからだ。

「もちろん正気だ。魔術を知り、なおかつ二ートな人間など他に居らぬからな」

俺、魔術は深く知らないんですけど？

これは、アレですよ？ 小学生が自分にとって新しい発見を先生に教えるに行くようなものですよ？

「流石に、無理がねえか？」

「無理ではない。今から魔術の本懐に足を踏み入れれば良いだけの話だ。幸い基礎はしっかり出来ておるしな」

「……………悪いな、やっぱり断らせてもらつよ」

やはり俺は、どこまでも臆病な人間だったようだ。

どういうものかもよく知りもしないものに怯えて、背を向けてしまった。

それも、1度ならず、2度も。

「そうか。引き受けて貰えないのであれば、この報酬は無意味だな。

さっさと仕舞ってしまおう」

そう言ってフィーリスは懷から札束を幾つか取り出すと金庫を開き、

「喜んで、お引き受けします!!」

金欲に負けた俺がそれを全力で止めた。

「そうかそうか、引き受けてくれるか。妾はとても嬉しいぞ」

止めてしまった今、この瞬間に思えば、なんて軽率な行動なのだろう。

「と、言うわけで、魔導書も持たぬ魔術教師など前代未聞だ。適当に見繕ってやるから付いて来い」

「了解!」
ラジャー



ジステイヴァール地下、機密図書館。

当然一般には公開されていない図書館だが、地下が気になる普通科の学生などごまんといる。

毎年何度か侵入を試みる生徒が居るが、彼らは例外なくこの地下への螺旋階段で諦める。

「触るなよ。一瞬で入り口まで逆戻りだからな」

一定段数までは普通の階段だが、その一定の段数を超えれば触れ

ただけで螺旋階段の入り口付近にまで戻される転位魔術が施されている。

その上、空中を通るにしても幾重もの感覚系魔術が施されており、例えば螺旋階段に沿って動いているように思えても全く別方向に動いていたたり、入り口に向かったりするなど、簡単に通れるようにはなっていない。

また、中央の吹き抜けにも転位魔術が施されており、階段同様、一瞬で入り口付近にまで戻されてしまう。

少なくとも基礎の基礎しかやっていない俺が独りで突破出来る代物ではない。

「さて、着いたぞ」

更に厄介なのはこの扉、内部の図書館から漏れ出す魔力に連動して扉の表面に結界を生じている。

そのため、力ずくで結界を破ったとしても扉を開くまでに結界が再構成される。

また、扉自体が異空間へのポータルになっているため、扉ごと破壊する程の威力を出すワケにもいかない。

そして、結界を突破出来るのはここにいるフィリスと、彼女の『連れ』として招待された人物のみだ。

「で、どうやって解除するんだ？」

フィリスにしか出来ない結界の解除法は純粹な好奇心として見てみたかった。

「ああ、まず体から一切の魔力を出さないようにする」

成程、魔術なら幾らでも誤魔化しがきくから、魔術に関連しない

部分で解除するのか。

「そして結界手前の魔法陣までゆっくりと歩き、身体認証を行う」

それだけだった。それだけで扉を皮膜のように覆っていた結界が霧散した。

「今から六十秒間、結界が解除される。それまでの間にこっちに渡っておけ」

そう言ってフィーリスは扉の向こうへと消えた。

「……よし！ 行くか！」

意を決した俺も続いて扉へと入る。

序章（後書き）

はい。まだ序盤の序盤です。

序章なんて大体そんなもんです。

続きは……書いてますけど、投稿日は未定です。

ま、こんな小説を読み続ける人も珍しいでしょうから、罪悪感
は欠片ほどありませんよ。

1章・万屋かつ教師かつ二トな24歳

「お主を入れるのは初めてだったな——ようこそ、ジスティヴ
アール機密図書館へ。妾はお主を歓迎しよう」

そう、俺が入るのは初めてだ。

初めてのはずだが……どこかで見たことがあるような？
デジャヴユってヤツか。発音が難しい。

「さて、お主に渡す魔導書だが……アリシア！」

アリシアが来てるのか？ 確かに三回生になれば一定単位を取った時点で閲覧が許可されるはずだが、怪異が渦巻く機密図書館内部はフィリスの引率がなければまともに歩くことすら出来ない先輩から聞いていたが。

と、思いを巡らせている間にアリシアが俺達の目の前に転移してくる。

漆黒の法衣と魔法陣の光に包まれたその存在は、人類を天へと導く天使にも、人類を地獄へと誘う死神のようにも、思えた。

「お母さん、何か……あ！」

俺の存在に気付いたアリシアが喜びの混じった驚きの声を上げる。

「来てくれたんですね。また会えて嬉しいです！」

「ああ、俺もだ」

と、問題はそれではなく……

「お母さん、ってどういう意味だ？」

隣に突っ立っているフィリスに訊ねてみる。

俺の聞き間違いでなければ、間違いなくアリシアはフィリスのことを「お母さん」と呼んだ。

苗字が違うし、第一、歳が離れすぎているはずだが……？

「どういう基準で『親』と呼べるかどうかは分からんが………間違いなくアリシアは妾の娘だ」

……二人の間で何があったんだ？

「ま、そんな事よりお主の魔導書だな。アレを出してくれ」

「はい！」

アリシアが魔法陣を展開。陣の意味は『転位』。
かなり小規模なものだ。

ま、本を出すのにそんなに大規模な転位術は必要ないんだろうが……。

そして彼女の掌に本来あらざる物質が顕れる。

その物体があったかもしれない、無限分の1の確率。

それを彼女は引きよせ、手に取る。

「これは……？」

そうして彼女の掌に顕れたのは、電子辞書ほどのサイズの端末。
どう見ても魔導書には似ても似つかない代物だ。

「相変わらずシユアナはいい仕事をしおるな。ほれ、お前の魔導書だ」

フィーリスは端末を受け取ると、それを俺の方へ差し出す。

「これが……魔導書………？」

どう見ても電子辞書にしか見えないが。

「その中にはこの機密図書館にある『金枝篇』みたいな基本的な魔導書のデータが五百ばかり入っておる。必要に応じて追加してやるから、これでバシバシ勉強するといい」

ほお、狭い事務所にこういう省スペースアイテムは素直にありがたいな。

「壊すなよ。シユアナ渾身の一品だ。壊れたらまたデータを一から打ち直さねばならんからな」

バックアップぐらい取っとけよ。

「さて、アリシア。もう戻ってもいいぞ」

「はい。分かりました」

アリシアは転位魔法を発動して俺達の視界から消え去って行った。

「ああ、それと、言い忘れていたが、お主が受け持つ学生はアリシアだ。よろしく頼むぞ」

何デスト？

アリシアのクラスを、俺が、受け持つ……？

「いやいやいや！ 無理だろ！ 絶対無理だつて！ アリシアは3回生だろ？ 何も知らない俺が教えられることなんて無いって！」

「まあまあ落ち着け。人は魔術に生きるのみならず、だ」

人を魔術教師に仕立て上げようとしておきながらよく言う。

「お主に頼みたいのはアリシアのクラスの担当ではない。アリシアの専属として就いて貰いたい」

「はあ！？」

なにお言つとるですかこのひとわ？

「お主も知ってるかもしれないが、アリシアは魔術に関する恐怖が無い。全く、微塵も、これっぽちも無い」

「まあ、そうだな」

魔術に関わって後悔してないかと訊いた時、どうして後悔するのかと逆に訊かれた事を思い出す。

しかも戻って良いと言われた時のアリシアは単なる好奇心から生まれる以上に嬉々とした感情を持って魔術に関わっているようにも思えた。

「多くの者があやつに恐れをなして、教師を辞退したくなるほどに、

あやつの魔術に対する探究心は凄まじい。今ではここの図書の四分の一ほどが読破されてしまった」

底が知れない機密図書館の蔵書の四分の一を読破した？

そんな化け物じみた人物に俺が何を教えろと？

「それ故にな、普通の人間の生活を殆ど知らんのだ」

「ちょっと待ってくれ。アリシアは幾つもバイトを掛け持ちしてるって言ってたぞ？ 普通の生活満喫してるんじゃないのかよ？」

そもそもアルバイトでもしなければ親の脛を齧る以外に生活をまともにやっていく方法は無いはずだ。

「魔術でな、自分の分身を幾つも作り出して後は自分の擬似人格に任せておるのだ。それを軽々やってのけるだけの能力をあやつは持つておったからな」

成程。止める理由も無かったから結局このまま、と言う事が。

「本来なら親である妾の責任なのだが、生憎と妾は、普通の人間ではない」

「……そこで、俺か」

「そうだ。多少変わった職に就いてはいるが、お主なら魔術を知っておるからこの学科の教師に来てもいいし、齧っただけの知識しかない。つまり多少人より魔術を知ってるだけの人間。妾から見れば十分に普通の人間だ」

「他の奴らは普通に就職したからほぼ無職同然の俺にお鉢が回ってきたって事か」

普通大学を卒業するぐらいの学力を持ち合わせていたら、どこかに就職するだろう。

就職せずに万屋やつてる時点で俺は普通な人間ではないような気がするが、四百歳以上の魔女よりは普通なんだろうな……。

「そうだ。……と、言うわけで、頼むぞ」

「……魔術の本懐に足を踏み入れるとかって話はどうなった？」

「ああ、そう言えばそんなことも言っておったな」

「俺の覚悟を返せ！」

「どうせ金で釣られおったクセによく言いおる」

う……それを言われると何とも反論し難い。

「そんな事より、名目上、お主はアリシアの家庭教師的な位置づけになるのだな。多少の知識はつけておいて損は無い。魔術の本懐に足を踏み入れてみるもよし、このまま基礎を齧るだけでもよしだ」

深い浅いはあっても、もう魔術からは逃れられないって事か……。

「とりあえず、これを読んでから、だな」

「くれぐれも軽い気持ちで読むなよ。腐っても魔術の基礎となる魔導書なのだからな」

「わかってる」

魔術の本懐に足を踏み入れる、ねえ。

仮に踏み込むとしたら、俺は、彼女のように、無事で居られるのか……？

▼

事務所に帰り、この先一年分の家賃を支払うと、俺はソファに寝転がった。

悲しいかな。実はこの事務所にはまともな布団すらないのだ。

「……ふう」

何にせよこれで家賃に困る事はない。

ただ、これから貯金の残高には気を配るようにしないとな。

なんせ今月は家賃だけで蓄えを全て使い尽くしてしまったし……。その後に依頼が全く来ないというショックな出来事があったからあんな事になったワケだが……。

普段なら一週間もあれば何かしらの依頼は来てたのだが、どうやら見誤ってしまったらしい。

しかし、臨時とはいえ、教師という職を手に入れたので当面は俺の生活も安泰だ。

ただ……その間はここを離れないといけないワケで……

「万屋、どうすっかな……」

▼

翌日、

「おお、それなら心配はいらん。仕事が入ったらアリシア共々働きに行くがよい」

流石、融通が利くのはフィーリスの良い所だ。

ただ……

「アリシアと……か？」

「何だ？ 妾の娘では不満か？ いつの間にお主は妾の娘にケチをつけられるような身分になりおった？」

「いえ、そのようなつもりで言ったワケではございません。ハイ」

不満とかは全く無い。むしろアリシアの魔術は推測の域を出ないが、俺の仕事にかなり役立ってくれるはずだ。

それ以前に、アリシアほどの魔術師なら、むしろ俺の方が助手に回るべきと言えるくらいだろう。

「……アリシアの協力が貰えるのはむしろありがたい。けどよ、講義を抜けるのはまずいんじゃないのか？」

「なんだ、そんな事を気にしておったのか？ そもそもここで誰が単位を与えてるのかを知らんのか？」

ですよ。ね。

「そもそもアリシアは最低限しか講義に出ん。いつも昨日みたいな

調子で、引きこもって魔導書と睨めっこしておるからな。大体の時間は空いておる」

それほどまでに引きこもってるのか。

そんな人間に俺が教えられるのは常識のみ、か。

「お主は事務所で暇を持て余して、客が来れば連絡してくれればよい。アリシアを送りつけてやろう」

「さいで……」

成程な。俺の役目は常識を座学で教えるのではなく、むしろ引きこもりなアリシアを外に連れ出す事が本命だったワケだな。

しかし、昨日の事といい、アリシア本人の意思お構いなしだな……。

せめて立ち合わせるなり何なりさせるべきだと思うが。

……ま、これで後顧の憂いは今度こそ無くなった。

アリシアとの一対一の授業か……主に情操教育に関して。外に連れ出すだけで、良いんだろうか？

「ん、どうした？ 若い男女が二人つきりというシチュエーションに興奮しておるのか？ 言っておくがアリシアはおぬしより強い。無理矢理でモノに出来ると思うでないぞ」

「そんなことじゃねえよ。ただ、情操教育って、外に連れ出すだけでいいのになって、な」

「もちろん連れ出すだけでは不十分だ。しかし、だからこそお主の職種が役に立つのだ」

「……確かにな」

万屋には様々な仕事が舞い込んでくる。
浮気調査のような探偵紛いの事から、機械の修理、落し物の搜索、
土木作業の手伝い等々……。

ただ、仕事が入らない時は全く入らないんだよなあ。
この先殆ど仕事が入らない可能性だってあるワケで……。

「ま、仕事が入るまではお主はこの大学に教師として籍を置くだけの
ニートだ。精々自宅でも警備しておくのだな」

「ニートって言うな！」

「黙れニート」

「はい……」

くそう。相手が魔女じゃなくってただの生意気なガキンチョなら
俺でも勝てるのに……。

「分かったらサッサと帰れ。研究の邪魔だ」

「何かいきなり俺の扱いが酷くなってませんか？ フィーリスさん
や」

「黙れニート」

笑顔で言われた。

面と向かってニートって連呼されると結構堪えるな……。

これ以上精神的苦痛を受けないよう、俺はフィーリスの研究室を立ち去った。



帰路につき、事務所の前で俺を出迎えてくれたのは人の良さそうな中年のオジサン。

ま、まさか……！ お客様！？

「万屋はここって聞いたのですが、間違ってますか？」

キタアアアアアアアアアアアア！！

「はい、ここは確かに万屋ですよ。時計の修理から浮気調査まで、何でもお手ごろな値段で請け負います」

久しぶりの依頼主だ。ここはひとつ、懇切丁寧な対応をしなければ。

「ああ、良かった。実は、私が飼っていた蛇が逃げ出してしまって…… 搜索を依頼したいんです」

「蛇…… ですか？ それなら警察に届け出た方が……」

と、言った所で取り忘れていた今日の新聞の一面が目に入る。

《連続猟奇殺人事件に関して、警察がかつてない大規模な捜査を開始》

場所がこの近辺か、確かに、これが相手じゃ蛇の失踪は見劣りす

るからな……。

「確かに、今の警察は動いてくれないでしょうね。分かりました！
請け負いましょう」

何にせよ、金が入るなら警察の領分を侵したって良いか。
どうせ気付きやしないし、気づいた所でどうしようなんて考
えないだろ。

「発見出来次第、連絡しますのでこちらに電話番号をお願いします。
後、蛇の特徴を可能な限り詳しくお教え下さい」

「はい、分かりました」

久しぶりの依頼だ。腕になる。



「……と言うワケで、蛇探しをする事になった」

「この辺りで連続猟奇殺人が起きたおかげで、ですよね……」

被害者の方には申し訳ないが、今回はそれで儲けさせて貰おう。

「ま、複雑な心境なのは分かる。そう言う時は、本来見捨てられて
しまう人を救えると考えるといい。そうすりゃ少しは気も紛れるだ
ろ」

全を救える英雄など存在しない。彼らは《多く》を救いはするが、
《全》を救える者など、この世に存在しないのだから。

そして俺はその英雄ですらない。

「……そう、そうですね。前向きに考えないと、ですね」

「ああ、そんじゃ、そろそろ出発するか」

「はい！」

1章・万屋かつ教師かつ二トな24歳（後書き）

ようやく1章掲載です。

勉強と趣味の両立が困難になりつつある今日この頃です。

こんな小説を読んでくださるごく少人数の方のため、がんばってみたいと思います。

書き溜めてた分は完全消費しちゃいましたので、次話投稿は随分遅れる見通しです。

2章・はじめての、いろいろ b y アリシア（前書き）

読みやすい長さで投稿することにしました。

2章・はじめての、ிரை byアリシア

「さて、こう言うのは聞き込みが基本になるわけだが、どこから探すべきか……」

「あ、それなら任せてください。シユアナさんからいいもの借りてきました」

そう言っ て彼女が取り出したのは、古ぼけたコンパス。

「私達が探している存在の方向を指し続けてくれる優れモノです！これさえあればどんな探し物でも一発です！」

そんな便利道具があつたのか。俺の魔導書といい、シユアナつてヤツは相当凄いヤツなんだな。

「で、どうやって使うんだ？」

「それはですね……。……。……。……。……。どう使っ ちゃったっけ？」

いや、俺に聞かれても……。

「す、すみません。使い方、忘れました……」

「駄目なら駄目でいいさ。魔術が使えないだけで、いつも通りになっただけだしな」

ぶっ ちゃ けて言っ と今まで万屋を営んできて魔術が必要になっ た依頼は全く無かつ た。

要は今回も以前と同じになるだけだ。

「じゃ、手分けして聞き込みを開始するか。二時間後にジステイヴ

アールの校門前な」

「はい。分かりました」

地道な調査がモノを言うからな……アリシアの根気が折れなきや
良いが……

2章・はじめての、ிரை byアリシア（後書き）

久しぶり…… ほぼ1年ぶりの投稿です。

相変わらず執筆と勉強の両立が難しいです。

大学受験って、ホント辛いですね。

今度はいつ更新するか、わかんないです……。

待つなら待つで、あまり期待しないでくださいね。

3章・努力だけで結果は残せない

やはりというべきか、2時間じゃ大して有力な情報は得られなかった。

「アリシアに期待……だな」

「あ！ リックさーん！」

……と、噂をすれば、だ。

嬉しそうに駆け寄ってくる。これは、何か良い情報が手に入ったか？

「コンパスの使い方、思い出しました！」

なんだ、有力な情報を聞いたワケじゃないのか。

ま、楽が出来るならそれに越した事はないけどな。

「そうか！ 早速使ってみてくれ！」

魔術に頼っては情操教育にはならないような気もするが、この2時間の聞き込みは結構な経験になったはずだ。

「ここをこうして……ここを、こうして……」

あ、そういえば発明者本人がこの図書館に居るんだから直接聞けばよかったな。

ま、それじゃ情操教育にならないから黙っておくけど。

「できました！」

アリシアのを見せてくれたコンパスは、北を向かずに明後日の方向を指していた。

「N極の方へ向かえば良いのか？」

「はい、確かそうだったと思います」

俺達はそのコンパスが指し示すままに歩き出す。

「壁とかも突き抜けて表示されるから結構面倒だな……」

何の手掛かりも無いよりは遥かにマシではあるが。

「そうですね、シユアナさんに伝えておきます」

「改良品でも作ってくれるのか？」

「はい。不満な点を言ったら、あつと言う間に改善しちゃいますからね、シユアナさんは」

すごいヤツだな。

「そんなにすごいヤツなら1回くらい会ってみたいな」

「や、やめておいた方が……良いんじゃないでしょうか……」

「シユアナさん、研究の邪魔をされたらすごく怒るんです。それはもう……遠慮容赦ない攻撃が……」

アリシアが惨劇(?)を思い出して身震いする。

「多分、普通の人が会ったら……死にますね」
「死ぬのか」

「はい……シユアナさんの『かいはついよく』に火が点いたら誰にも止められません……ほんとに」

アリシアでもシユアナってヤツには勝てないのか？

こう言っヤツは引きこもってて運動不足になりがちだと思っんだが……。

ま、どうしても会いたくなったら、フィーリスでも連れてきや大丈夫だろ。

そんなことを考えながら俺たちは目的地へと歩き続ける。

4章・他所の家でお茶漬を食べたらすぐに帰りましょう

コンパスに導かれ導かれ、俺たちは人気のない方へと歩を進めてゆき、廃墟街へ。

そして、廃墟街の中、ついにコンパスの示す1点へとたどり着いたのである。

「この建物……か？」

俺達がたどり着いたのは、廃墟が立ち並ぶ中で、一際廃墟らしい出で立ちの建物。

……自分で思ってた何だが、廃墟らしい出で立ち、って何が基準だよ。

「今辺りを回ってきましたけど、やっぱりこの建物の中みたいです
ね……」

いくら廃墟であつたとしても勝手に入るのは気が引けるが……。

「リックさん。カギ開いてるみたいですよ？」

もう入ろうとしてるし……。

まあ、何かあつたら魔術でどうにかすればいいか、アリシアの。

「分かった。今行く」

俺もアリシアを追うような形で建物の中へと入って行く。

玄関を過ぎ、リビングへ。

外観からではよく分からなかったが、内部は意外とゆとりある間

取りになっていた。

「思ったより広いんだな」

もつとも、家具とかが全部無いからだろうけど……。

「……あれ？」

「どうした？ 何か見つけたのか？」

サッサと依頼を終わらせてここからオサラバしたい俺としてはアリシアの発見は役立つだろう。是非聞いておきたい。

「外を見た限りいくつかヒビが入った窓ガラスがあったんですけど、全部何とも無いんです……」

「え、それってつまり……」

「はい、オバケの仕業に違いありません！」

「おいこら待てやそこの魔女っ娘」

普通魔術って考えないか？ 何でファンタジーの世界にドップリ浸かってる人間がオバケなんてお門違いなモノ出して来るんだ。

「冗談です。魔術でしょうね。この分だと」

舌をペロツと出して言う。

その仕草は非常に可愛いのだが、

「それって、ここに誰か居るってことじゃないのか……？」
「……ですよね」

それも魔術師だろう。

もし相手が敵意を持ったヤツなら……。……ま、アリシアが
いるし、大丈夫だろ。

なんて考えてた矢先だった。

「あらあ、お客様なんて珍しいわねえ。でも、チャイムも鳴らさず
に入ってくるなんて、礼儀知らずなお客様も居たもんだわねえ」

——背後に人の気配！？

さっきまで誰も居なかったはずなのに！？

4 章・他所の家でお茶漬を食べたらすぐに帰りましょう（後書き）

毎回サブタイトル考えるのはしんどいです。

1話あたりを短くしたから、その分たくさん考えないといけないですよねえ。

でも番号だけって言うのは味気ないですし、結局は考えなきゃいけないんですよね。こだわりのためには。

5章・どんな見た目の人も大真面目でその姿をしている

「初めましてえ。この第12魔術研究所主任の、ロジャー・トレヴァーでえす」

……。……。ハッ！？

一瞬思考が停止してしまった。

俺の目の前に顕れたのは……。なんだろう？

まず白衣を着ている。

やや鬱陶しい女性な喋り方をする。

ここまでは良い。ここまでは、まだ良い。

なんか無駄にマッチョな肉体に渋いオヤジ顔。

そして極めつけは……。白衣の下に着込んでいるチャイナ服だった。

「どうも、万屋を営んでおりますリックです」

「ジステイヴァールの学生のアリシアです」

……。ってあれ？　ここって自己紹介して良いトコだったけ？

「あらあん、可愛い……。好みだわ」

どっちがだ！？　俺である可能性が否定出来ないのがコワイ！

アリシアなんて俺の後ろに隠れちゃったし！

「ほらほら、そんな貧乏そうな男の背中に隠れてなんかいないで出ていらつしゃい。別にとって食べたりはしないわよお」

ほっ、俺じゃなかったか。

……なんて安心出来る状況じゃねー。

アリシアがますます怯えてしまつて俺の背中に完全に隠れるほどに縮こまつてしまった。

「俺達はこの建物の中に迷い込んだ飼ひ蛇を探しに來ただけだ。用が済んだらサッサと歸らせてもらつよ」

可能な限りこいつらには関わらないようにするべきだろうな。
敵か味方が分からない魔術師と対峙している時間は短いに越した事はない。

「それつて、この子のことかしらあ？」

ロジャーは部屋の明かりを点けると、自分の腰のベルトキットに取り付けてあつたフラスコを取り出し、俺達に見せる。

フラスコの中には元氣に動き回る蛇の姿があつた。

「コンパスが反応してます！ 多分この子です！」

「そうか。ロジャーさん、そいつを俺達に渡してもらえないか？」

ロジャーが友好的な人物であれば、これで依頼が完遂出来るが…

…。

「そうねえ。ちょっと協力してくれるなら、良いわよ」

「出来る範囲なら、何なりと」

「そう？ じゃ、お願いね」

ロジャーが指を鳴らした。

一瞬と待たず、俺達の足元に巨大な魔法陣が顕れ、次の瞬間、世界が裏返し、表返る。

「結界!？」

裏返ったのは俺達の世界、表返ったのは、異形の世界。

「見たところあなた達も魔術師みたいだし、この子達の良い餌になりそうじゃあ」

ロジャーの背後の魔法陣から次々と召喚されるのは、ヒト型をした怪異。

ただ、目は盛り上がり、肌は鱗で覆われており、指と指の間には蛙のような水かきが出来ている。

半漁人を髭髯とさせるその姿は『深きものども』だ。

「別に俺たち、争いに来たわけじゃないぞ」

「聞くと思つて? 何のアポも無しに不法侵入してきた魔術師よ。あなた達って」

そうだね。不法侵入者だね。

魔術師云々はともかく、そこは反論しようがないな。

「ついさっき『とつて食つたりはしない』って言つてなかったか?」
「あら、そんなこと言つたかしらん?」

すつとぼけやがったよこのオカマ野郎。

「……交渉の余地は無い、か」

5章・どんな見た目の人も大真面目でその姿をしている（後書き）

今日はここまで。

続きは明日ないし明後日に投下します。……………たぶん。

サブタイトルが思い浮かばなかったらもっと先になるかも。

6 章・知っていると使えるは違う

俺は彼我の戦力分析を行う。

向こうは魔術師一人と深きものども、数多数。

こっちは魔術師一人と魔術師もどき一人。

依頼がアリシアのいない一週間くらい前だったら魔術師もどき一人だったワケで……確実に負けるところだった。

危ないところだったな。マジで。

さて、深き者どもの能力だが……呼び出した術者によりけり、ではあるものの、一般的に身体能力は人間のそれを大きくとまではないかなくとも上回っている。

とは言え、ブッチャケた話、一体程度であれば普通の人間でも十分に太刀打ちが出来る。

何故ならば……

腰のホルスターから黒い塊を抜き取る。

アタイアM94A2。ファイリスに護身用にと預けられた実銃。

俺はまずトリガーセーフティを解除する。

グリップを握り締め、銃口を向ける。

狙うは正面の深きものども、と言っても数が多いので狙いを定める必要はないだろう。

「現代人を、侮^{なめ}るな！」

引鉄を引いた。

マズルフラッシュと共に射出されるのは九？弾。

凡人にも扱いやすい口径なので、反動はやや少なめ、それにより命中精度も比較的高い。

また、威力としても深きものども相手には申し分ないだろう。

そして、その予想は正しかった。

深きものどもの一体から血液らしき液体が噴出し、そいつは悶えながら倒れ伏した。

「よし！」

この調子で全部始末してやる！

俺は弾倉内の弾が無くなるまで連射し続けた。

……有効打のみを見れば、命中率は4割強ってところか。野球なら首位打者だ。

いや、そんな事より問題なのは……

「全然減ってないような気が……」

リロードを行いながら呟く。

「じゃ、次は私の番ですね」

いつの間にか法衣を纏ったアリシアは鞆を置くと俺の前に出、透き通った声で詠唱を始める。

常人には発声することは愚か、聞き取る事さえ出来ない異形の呪文が彼女の口より紡ぎだされる。

「イア、イア——ハスター！」

結局、俺が聞き取れたのはこの最後の1節だけだった。

詠唱の終了と同時に、強烈な光と共に顕現したのは剣、異形の剣。

風を連想させる流麗なフォルム、そしてカマイタチを連想させる鋭く輝く片刃の刀身。

ハスターの剣。

「はあああああ……」

剣に魔力を込め、物質化。さらに確率事象を固定させ、完全に具現化する。

「征きます！」

次の瞬間——剣が咆哮した。

「グッ……」

不快感しか感じられないこの音は何だ？

発泡スチロールを擦った音や、黒板を引っ掻いた音なんかとは格が違う。

嫌悪感と同時に絶対的な畏怖を脳に、魂に、直接叩きつけられたかのような感覚。

見れば深きものどもも剣の咆哮にすくんでいた。

「やあああああああああああ——！」

アリシアが踏み込む。

迷いも何も無い、純粹で、真っ直ぐで、そして疾い踏み込みだっ

た。

俺が気付いた時には既にアリシアは一の太刀を打ち込んでいた。

「あ——」

剣戟は一瞬。

正眼の構えから振り下ろされた剣は、深き者どもの身体を頭から腰にかけてを、まるで水滴でも切るかのように抵抗なく降りて行った。

深き者どもの1体が左右対称に、両断された。
綺麗な断面は瞬く間に崩れ、臓物や血液を垂れ流してゆく。

そんな間もアリシアは行動を続ける。

横薙ぎに一閃。

右隣にいた深き者どもが上半身と下半身に分割される。
仲間2体が殺されて、やっと深き者どもは状況を理解したようだ。
各々アリシアに向かって飛びかかってゆく。

「あ、あぶな……………！」

「——イア、ハスター」

アリシアが一瞬で詠唱を終える。

次の瞬間には彼女の周囲数メートル以内にいた深き者ども全てが、見えない何かに切り刻まれ、ただの肉塊と化していた。

これは……カマイタチか？

「……………この程度ですか？」

アリシアはカマイタチを収めると、余裕しゃくしゃくの表情で残った深き者どもを剣で切り裂きはじめた。

それは戦闘と呼ぶにはあまりにも一方的で、まるで処刑者と、罪人のように、殺し、殺される関係が明確だった。

「…………と。仲間にビビってる場合じゃないな」

俺は内心で自分が連れてる魔術師の規格外の力に戦慄しながら、援護射撃を開始する。

「当たれよ…………」

赤貧生活を送っていた俺が銃の扱いに長けているはずはない。

なのでアリシアに当てぬよう、魔術による補正を掛ける。

俺はアリシアに当たらない可能性を引き寄せ、手に取る。

引鉄を、引いた。

銃声が結界内に木霊する。

…………やっぱ、すっかり学んでおけば良かったかもしれない。

確かにアリシアには当たらなかったが、あれだけたくさん居る深きものどもの中のどれにも当たらないとは…………。

「今度は外さないから…………」

再度術式を展開。
命中する可能性と、アリシアから逸れる可能性を同時に引き寄せる。

「食らえ！」

引鉄を引く。

火薬の破裂音がした。腕に反動がかかった。弾が射出された。

次の瞬間、深きものどもの一体が悶絶して倒れる。

「よし、次！」

しかし、狙いを定める前からアリシアに捌かれてしまうので引鉄を引くことすら出来ない。

「これで、終わりですか？」

そして、遂に次弾を放てないまま、最後の1体がアリシアの剣の下に切り伏せられる。

「あら、可愛い顔に似合わず、強いよね。そっちの貧乏そうなのは酷い有様だったけど」

うるせー、余計なお世話だ。

「じゃ、ちょっと大物出しちゃおうかしら」

ロジャーが詠唱を始めた。

「——いあ、いあ、くとうるふ・ふたぐん。いあ、いあ、くとうるふ・ふたぐん」

新たな影が結界内部に入り込む。

巨大、そう、巨大な存在だった。

「何だ、これ……？」

6章・知っていると使えるは違う（後書き）

本作品初、戦闘シーンですね。

と、言うワケで、残酷な描写ありました。
ボーダーが分からないから、念のため。

7章・デカければいいというものじゃない

鱗に覆われた体、水かきのついた手足、ぞっとするほど分厚くてたるんだ唇、突出するどんよりとした目、他にも不快な特徴を持ちながらも、全体の輪郭はいまいましいほど人間に似ている。

「ダゴン……ですね？」

そう、ダゴンだ。

初めてフィリスに会った時に見せられた写真に映ってたやつとそっくりだ。

あの頃はただの合成や加工だ、って信じて疑わなかったけど、実際見てみると、納得せざるを得ない。

イヤでも実感が湧いてくるってもんだ。

——自分とはんでもない世界に足を突っ込んでるんだ——って。

「さ、ダゴン。敵はあいつらよ！ やってお終い」

どんよりとした瞳が俺達を捉えた。

いや、正確には、アリシアの持つハスターの剣を。

「ああ、確か、ダゴンはクトウルの眷属でしたよね」

アリシアは挑発するように、見せつけるように剣を構える。

「これはハスターの力の片鱗、相性は最悪ですね。お互いに」

彼女が言い終えるが早いか、ダゴンが拳を振りかざした。

それでもアリシアは眉1つ動かさず、拳が振り下ろされるのを待ち焦がれるように見つめている。

おいおいおい！ 余裕ぶってる場合じゃなくヤバイだろ！
この距離じゃ俺が走ったところで間に合わない！

このままじゃアリシアは死ぬ。と思った。

同時に、この余裕には実力だけでなく、別の何かに裏打ちされている、と思った。

迷いながらも俺は、彼女を信じてみることにした。

拳が——命中する。

華奢な体が簡単に弾き飛ばされ、結界の内壁に衝突。

叩きつけられたアリシアはそのまま力なく壁面をずり落ちる。

「え……………？」

ワケが分からなかった。

どうして？ あれで、死んだのか？

「う、ウソだろ…………？」

俺は思わず、アリシアの方へ駆けだしていた。

近くに寄れば寄るほど鮮明になる不快な光景。

あらぬ方向にへし折れた腕、結界の壁面にへばり付いている大量の血、そして、もはや服なのか、皮膚なのか、臓腑なのかも分からないほどに潰れてしまった胴体。

あんなに強かったのに、どうして？

「あら、随分簡単に死んじゃったわねえ。ま、いくら魔術師と言っても所詮は人か」

……そうだ。何を過信していた。

魔術師と言っても、生身の人間である事には何ら変わりはないじゃないか。

アリシアを漫画のヒーローみたいに思ってしまった自分自身が情けない。

「じゃ、あなたも天国に送ってあげるわ」

ダゴンに手で合図を送るロジャー！。

立ちすくんだまま動けない俺。

このままじゃ死ぬか？ ……うん、間違いなく死ぬな。

死んだところで、悲しむ人間も居ないし。やりたい事も……。…

………あるだろうが！

こんなことで、死ねるかよ！

俺は無駄と知りつつも、アタイアをダゴンに向け、構えた。

打つ手が無いと分かっているにも、何もしないでは居られなかったから。

「さ、やっておしまいなさい！」

ダゴンの拳が俺を叩き潰そうと振り上げられたまさにその時――

「ダゴンを、止めてもらえませんか？」

その指示を取り消すよう、ロジャーに剣を突きつけ脅迫するアリシア……。……アリシア！？

「ウソ……。あなた、いつの間に……？」

「ついさっきですよ」

気付けば、俺の隣に転がっていたはずの死体が消えていた。

撒き散らされた血痕までもが、跡形も無く、まるで忘れろと言わんばかりに。

「なるほど、ニセモノぶん殴ってたって事ね」

「それより命令、取り消してください」

「……………ええ、分かったわ」

拳を振り上げたまま停止していたダゴンが構えを解く。

「ありがとうございます。……あと、あなたには2、3訊ねておきたい事があります」

「……………」

無言を肯定と受け取ったアリシアは質問を開始する。

「ダゴンクラスの召喚を儀式も無く行える魔術師は居ません。あのダゴンの紛い物、どうやって生み出しました？」

ロジャーはしばらく迷った様子を見せた後、毅然とした態度で口を開いた。

「答えられないわね」

「では次、どうしてその蛇を捕まえたんですか？」

「だって、だって、爬虫類とか、両生類とか大好きなんだから」

…… 研究とかの実験材料にするんじゃないのか。
でも何でフラスコに入れてた？

「最後、あなたは第12魔術研究所主任、でしたっけ？ 背後にある組織、何が目的ですか？」

「ごめんなさいねえ。これも答えられないわ」

「そうですか」

アリシアは特に落胆した様子もなく、質問を終える。

「それより、アタシも1つ聞いていいかしら？」

「…… なんですか？」

「あなたの膨大な魔力。どこから供給されてるのかしら？」

旧支配者の力の片鱗を召喚し、分身、その後、透明化して背後を取る。

確かに驚くべき能力だが……そこまで魔力を消費するものでもないよな………？

「答えたくないなら答えなくてもいいわよ？」

「じゃあお言葉に甘えて、答えません」

「あらら、1本取られたわね」

ロジャーも特に落胆した様子無く質問を終える。

「質問はそれだけですか？」

「ええ」

返答を聞いたアリシアは無言で頷き、剣を下す。
それに合わせるようにロジャーが指を鳴らし、元の世界が表返る。

「お目当ての蛇ちゃんよ。大事にしてあげてね」
「はい」

アリシアはフラスコを受け取り、鞆の中に入れていた折り畳み式
ケージを組み立て始める。

「随分とアツサリ渡してくれるんだな」

あまりにも簡単に折れてくれたのはどうも腑に落ちない。
ここは1つ、本人から理由を聞かせてもらおう。

「交渉って言うのはね、絶対的優位を相手に取られた時点で成り立
たなくなるのよ。覚えておきなさい、坊や」

今がまさにその時ってワケか。

「彼女、強いわ。多分だけど、この世界の誰よりもね」
「そこまでか？」
「ええ、彼女の力、余す事なく使えば世界が変わるわ……世界が、
ね」

アリシアについて語るロジャー。
その顔は、狂気の発明をしたマッドサイエンティストを連想させ
るものだった。

「根拠は？」

「女の勘ってヤツよ」

……………で、結局お前って性別どっちだ？

「入れ替え、終わりましたよ〜！」

話が一段落したところでアリシアが入れ替え作業の完了を告げる。

「時間切れみたいね。それじゃ、また会いましょう」

「俺は2度と会いたくないがな」

「……………ツンデレ？」

「死ね」

俺はロジャーの一言を一蹴すると、アリシアと共にこの場を後にした。

7章・デカければいいというものじゃない（後書き）

まだ評価してもらえてないのはちょっと悲しいかも、とか思う今日この頃。

これで書き溜めた分はほぼ全て投稿しました。
また当分更新はしないでしょう。

8章・お金が無いのは首が無いのと同じである

「あゝ、ひでえ仕事だったな」

俺は事務所のソファに寝転がると、今回の仕事の内容を思い返してみた。

……アリシアが居なかったら間違いなく死んでたな、うん。

「でも、蛇さんが無事で良かったです」

まあな。魔術の儀式に殺されてた日にゃ、依頼主に何と云えばいいか。

「目的も達成したし、そっちは大学に戻るか？」

「はい、お母さんに初仕事の報告もしておきたいですし」

「そっか、じゃ、また今度な」

「そうですね。また今度会いましょう」

アリシアは微笑みながら手を振り、事務所から去って行った。

「さて、と」

俺は受話器を手にとると、事前にメモしておいた番号をダイヤルした。

「どうも、万屋イスデイルです」

『あ、万屋さんですか？ どうされました？』

「それらしい蛇が見つかりましたので、こちらに確認し『マジッスか！？』」

おおっ、今までのキャラが崩壊を……。

「え、ええ。それで『わかりました！ すぐに向かいますッ！』

あ、一方的に切られた。

まいっか。1時間後くらいには来るだろうし。

……数分後。

「いやあ！ どうもありがとうございました！ いなくなってしまう時は自殺まで考えていたものですよ。ははは」

ペットに愛情注ぐのは悪くないが……自殺までするか？ 普通。
てか、電話から10分も経ってねーぞ。どんだけ速度出してたんだよ？ おっちゃん。

「しかもこんな^{即日}に早く解決していただけるなんて感激です。 ああ——よく戻ってきてくれたねマルレーン」

恍惚とした表情で蛇に頬擦りするおっちゃん。

……全然絵にならねー。

「とにかく、ありがとうございました！ 報酬の額ですが……これくらいでいかがです？」

紙にペンを走らせ、俺に見せてくれる。

……。はい？

いち、じゅっ、ひゃく、せん……

「5000……ダロ？」

俺はダロの価値を考えてみる。

えっと、1ダロで缶ジュース1本が買えるから……………。

スゲー。金持ちってスゲー。

5000ダロだよ、ごせんだろ。

1ダロ紙幣が5000枚だよ。

「あ、安すぎましたか？　じゃあ倍の10000ダロでどうです？」

いちまん……………。

「10000ダロで、お願いします！」

父さん、母さん、ゴメン。俺って、清々しいぐらい俗物だったみたいだ。



——同日、某所にて

男が3人居た。

1人は跪いている大柄な男、ロジャー。

1人は彼に向かい合って立っている細身の紳士風の男。

1人は玉座と思しき席に足を組みながら座っている男。ただし、

彼の顔には道化師のような仮面が被さっており表情は読み取る事が出来ない。

そもそも仮面をかぶっている以上、男と断定もできない。

「では、君が交戦したと言う魔術師が『匣』を持っていると?」

細身の紳士風の男が良く響く声で、ロジャーに問いかける。

「ええ、私の勘が正しければ間違いないわよ」

「ふむ……」

紳士風の男は少し考えるような表情を見せる。

ロジャーの勘を単なる勘と切り捨てない点に注目すると、彼はロジャーの勘をある程度信頼しているらしい。

「どうされますか?」

紳士風の男が振り返り、仮面を被った男に訊ねる。

「そうだな……」

仮面の男はしばらく考えるそぶりを見せた後、組んでいた足を解き、立ち上がる。

「なら、我が確かめて来よう」

「「な………ッ!」?」

仮面の男の放った言葉に残りの2人の表情が硬直する。

「何か問題でも?」

「あ………ありま、せん」

「あ、アタシも無い、わ」

「そう構えるな。ただ待っているだけ、というのが嫌なだけさ」

道化師のような滑稽な表情の仮面に覆われた彼の表情は全くうかがい知る事が出来ない。

だが、声色だけは、まるで新しく買ってもらったおもちゃの箱を開ける子供のような、純粹な期待に彩られていた。

「では、さっそく準備をしよう。『傀儡』を用意してくれ」

「……了解しました」

8章・お金が無いのは首が無いのと同じである（後書き）

一応、キリのいいところまで持っていこうかと。
多分これ以降は来年まで更新しないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881n/>

捨てる魔王あれば救う英雄あり

2011年11月16日05時58分発行